

「石見根付 (上)」

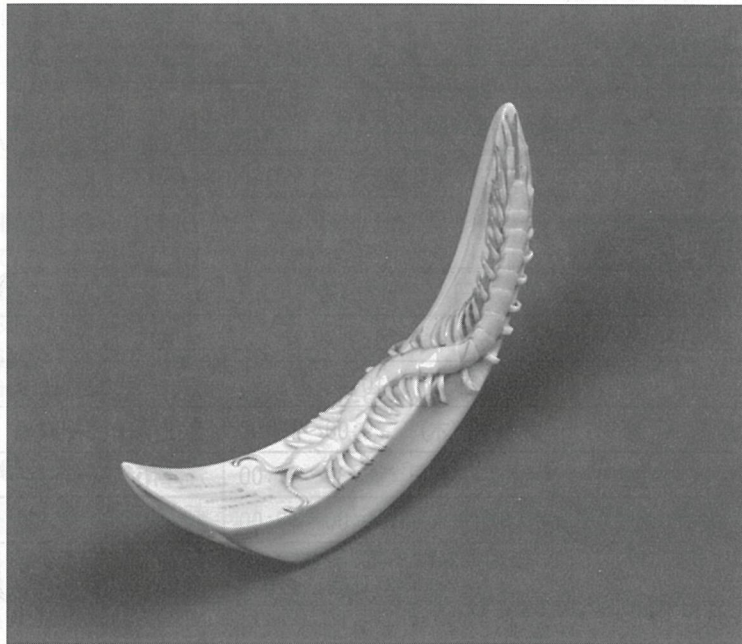
世界が認めた技と芸術性

和服にはポケットがないため、印籠や煙草入れなどの紐を帯に通し、落ちないように紐の先には留め具を付けました。このような装身具の一部を「根付」と呼びます。

根付の語源には、紐の根元に付けたからという説や木の根を切つて使つたからという説など様々な説があります。

日本人の豊かな創造性は、約5cmほどの留め具を単なる日用品の地位に安住させず、様々な創意工夫を凝らし、普遍性を帯びた芸術品に昇華させました。

根付は、全国のいたるところでつくられていましたが、そのなかでも独特の視点・特徴ある材料を用いてつくられたのが、この江津を発祥の地とする「石見根付」なのです。今から約250年前、現在の嘉久志町に居を構えた清水巖は、石見根付の祖とされ、「石見の左甚五郎」と呼ばれるほどの名工でした。巖は富春とも称し、娘の文章女、孫の巖水及びその一門は、石見



「百足」
青陽堂清富春 (清水巖) 作 寛政2年 (1790年) 猪牙 約9.8cm
写真: 杉本雅美 「古美術 緑青 No.20」 (マリア書房刊) より転載

の自然を模した多くの秀作を残しました。

石見根付の大きな特徴として、一般的な木や象牙だけでなく、当時から手に入れ易かつた猪の牙を使つたこと、他に比類のない優れた写実性・表現力、彫りと銘に浮彫や毛彫を配したことがあげられます。

クモやカニ、ムカデなどの身近な生き物を題材に、まるで生きていけるかのような精緻な描写とそれを可能にした技術は驚くほど高度なものです。

しかし、日本人の生活様式が西洋風のものになるにつれ、根付への関心は薄れていきました。石見根付発祥の地、この江津でも例外ではありませんでした。

皮肉なことに、忘れ去られようとしていた根付に再び光を当てたのは、ほかでもない西洋の人びとでした。その証拠に、ヨーロッパで

は、今から100年以上も前から根付は上流階級のコレクションの対象でした。現在でも、かの有名なサザビーズを始めとする海外のオークションにおいて、驚くような高額で取引されているほどです。

海外で根付収集が始つた当初から、その価値を認められていた石見根付には特に注目が集まり、われわれがその価値を見直す頃には、市内に存在していた巖や文章女などの超一流の作品の多くが海外に散逸してしまいました。残念なことに、今では市内にその作品はほとんど残っていません。

昔の石見地方が他の地域からは閉ざされた土地であったことが逆に幸いし、石見根付は異文化の影響をほとんど受けず、江津の文化・江津の人々の気質を色濃く反映しています。

清水巖とその一門の根付には、碧い日本海も江の川の流れるも高角山の雄々しさも、なにより江津人の熱い思いも全て込められていると言つても過言ではありません。

郷土の生んだこの至高の技術と作品に、市民の皆さんが再び思いを馳せていただければ幸いです。

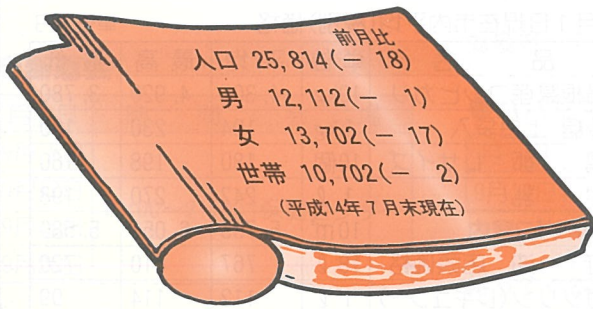
編集後記

▽世界的にも認められている石見根付の優れた写実性と卓越した技巧。その発祥の地が、ここ江津であるということに誇らしく思いました。

▽石見根付の魅力、郷土の文化としての重要性をできるだけ多くの市民のみなさんにお伝えできれば幸いです。

▽実物の石見根付は石見安達美術館 (浜田市) で今月より展示されます。興味のある方は、ぜひご覧ください。

(未来)



前月比
人口 25,814 (-18)
男 12,112 (-1)
女 13,702 (-17)
世帯 10,702 (-2)
(平成14年7月末現在)